中川根ふる里通信

＝ 第62号 ＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾
TEL. 0547-58-0015　859-6
郵便振替口座 00870-4-81556

天皇さま皇后さま。　2002年8月1日 15時すぎ 東京駅にて、

あれほど暑かった日々も、九月十日頃を境に涼しい日が続き、すっかり過去のものになってしまった感がします。七月には季節外れの台風が三つも静岡県目掛けて進行し、上陸の予想も外れ、いずれも房総半島方面に向かいましたね。

東日本太平洋側から西日本が猛暑、少雨量の頃、雲の帯は日本海から東北地方、北海道に常にかかり、そちらは雨続き低温な夏だったと聞きます。

それにしても寒暖計が30度位だと、ここちよく感じられ、「これが地球温暖化現象なのか」と想像させ、消費電力量は本年最高と報じられるにつけ、「冬期の暖房より、夏期の冷房の方が電力を消費するのか」でも待てよ、水力発電は環境破戒、火力発電は温暖化に拍車をかけ、原子力発電は生命滅亡の危険と隣合わせ、「もし、今電気が使えなくなったらどうするの」と思いつつも34度は我慢の限界と、クーラーのスイッチを入れる日が続きました。それでも緑に囲まれた地域ですから、日陰や木陰は涼しく夕方からほっと一息入れることが出来ました。化石資源を〝今〟がよければ使ってしまう事はあまりにも勝手すぎます。代わるエネルギーを考えたり、昔、生活した知恵を思い出したり、身近かにお来る電気、水道、ガス等の節約を心掛けたいものです。

国の施策の一つである地方自治体の統合、市町村合併問題ものどかなふる里の行政と住民を悩ませております。『現在の自治体を三分の一にする施策に対し、平成十七年を目途に枠組を組立てなければ、交付金をどんどん減らすよ』のお達しに、財源の少ない山村は解答に苦慮しています。中川根町でも合併を考える町民会議（25人）が設置されたり、各地区を回り、現況説明と住民の意見を聞く会が行われたり、真剣な取組みがなされています。

国の施策ですから近い将来どこかと合併する方向に向かうとは思いますが、地域性や産業、人柄、文化などに共通点を持った〝川根地域（川根町・中川根町・本川根町）という観点も是非視野に入れてほしいと思っているところです。すでに二十余年前から〝川根は一つ〟〝運命共同体〟などの官も民も動いているのですから。

ある人の意見「茶業・林業の低迷、高齢社会、ほかの産業もだめ、こんな貧乏な町は早く合併して大きな所に面倒を見てもらわにゃーしょんないだ。」に対し、町長が「私は、この地域が貧乏だとは思っていない。たしかに地場産業の低迷はあるが、豊かな森林や畑は経済では計れないほどの価値がある。将来それが認められる時代が来る。」といった内容の答えをされていたように気懐っています。行政のトップが地域性を考えてくれていてうれしくなりました。

前回号で、町制施行四十周年の記念の行事が、いろいろ計画されている事を載せました。八月十七日には、町商工会主催の〝夏まつり〟が行われ、高郷前の大井川広場には大勢の人が集まり、露店やゲーム、夜には、手踊りや花火とにぎやかなお祭がくりひろげられました。お盆のお休みについで土曜日とあり、ふる里へ帰って来ていた人達も加わり大好評でした。特に久しぶりに打上げられた花火は、短時間にまとめて打上げられ、百花繚乱のごとく、見事でした。

秋の深まるにつれ、各地区のお宮のお祭りもはじまりました。近年、お祭りも日曜日に行われる地区もあって、その年に大祭日が変わるところもあります。県指定無形民俗文化財の『徳山神楽』が奉納される、徳山神社のお祭りは十月十三日です。素晴しい伝統行事ですから、是非見に来て下さい。

町制40周年記念
中川根町産業文化祭のご案内と、(中川根ふる里通信大交流会)のご案内

11月3日 9時 ～ 16時ごろまで
11月4日 9時 ～ 13時ごろまで
役場か山村開発センターを会場に
大交流会をひらきます。(2日間)産業文化祭を見ながら、懐しい人々との再会に、是非、中川根町にいらっしゃって下さい。

十一月二日～四日(三日間)は町産業文化祭が催されます。例年一日でしたが今年は町制四十周年記念として、大産業文化祭が行なわれます。ふる里通信でも、一室を借りて、町出身の方々、中川根をふる里と想っている方々、町内の方々などの交流コーナーをもうけます。懐しい人々、ふる里への想い、など、大いに語り合っていただきたいと思います。お茶とふる里産品も用意してお待ちしております。
三日、四日とも様々なイベント、地場産品の展示即売会など、年に一度の町民が集う日ですから、そちらの方へも参加しながら、ふる里の秋を味わいにいらっしゃって下さい。

期日	催事内容
11月2日(土)	○記念式典（会場：健康増進施設）
11月3日(日)	○ＳＢＳラジオ公開放送（録音）：午後 ○特設ステージイベント ○地場産品の展示即売会 ○芸術作品の展示（会場：中川根中学校体育館）
11月4日(月・祝)	○芸能音楽発表会（会場：健康増進施設） ○特設ステージイベント ○地場産品の展示即売会 ○芸術作品の展示（会場：中川根中学校体育館）

表紙、写真のこと
八月一日、東京駅上越長野新幹線ホームで天皇皇后両陛下と偶然、近距離で拝謁させていただきました。連続でシャッターを切りました。

頑張りました。

中中野球部、県大会出場！！

中川根中学校野球部が、第55回静岡県中学校総合体育大会 軟式野球の部（県大会）に出場し、ベスト16に入るという成績を収めました。これは夏の大会において、中川根中学校野球部創部後はじめてで、中体連志太榛原地区大会において３位に入賞し、県大会に出場したものです。

ふるさと夜話三十三話

天狗と思った奴凧

原田耕作

昭和の初め頃の実話である。私の親戚の農家に農閑期には炭を焼いて生計を立てている家があった。炭焼の仕事は主にその家のお爺さんの仕事で、毎日山に入り、たまに仕事場に泊る時は炭窯をとめる時間が夜になった時だけだった。

炭焼の山林は熊切村川上（現春野町）の自宅から十三キロもはなれた深い山だった。茶期も近くなった四月の暖かい夜だったと言う。何でもその夜は夜なかの一時頃になって炭材が焼き切れた、と思って炭窯の火を止めた。

まだうすく煙が立っていたが、『この位なら大丈夫。立派な炭ができるだろう。早く眠ろう』とふたたび小屋へ入ろうとした時、ふと何気なく近くの大きな杉の木を見上げたところ、『おや？何だろう』杉の木のてっぺんに変なものが動いているではないか。四月のおぼろ月夜であったから何であるか良く判らない。

お爺さんは気味悪くなって、あわてて小屋へ入り戸をしめ切り、せんべいぶとんにくるまって目をつむったがなかなか眠れない。そこで考えた。『一体今動いているものは何だろう……』

ここからあまり遠くない秋葉山の奥の院といわれる龍頭山戒光院では常に天狗を使って日頃の用事を足しているという。天狗はどこまでも空を飛んで戒光院の用事を果すという。今夜用事の帰途ここでひと休みしたのかも知れない……。お爺さんはとろとろとして朝を迎えた。

起き上って先ず第一に杉の木のてっぺんを見た。そこでお爺さんの見たものは――お爺さんの思ってもいなかった大きな奴凧だった。『なーんだ。どこかの凧が糸が切れて舞ってきて、杉のてっぺんへひっかかったのか。』龍頭山の天狗ではないかと考えたことが馬鹿馬鹿しいことだったと笑った。

しかしお爺さんは『待てよ』と考えたと言う。もし昨夜俺が寝た後強い風が吹いて奴凧がまたどこかへ飛んでしまったら杉の木に奴凧は居ない筈だ。そうすると昨夜杉のてっぺんで動いた怪体なものは、まさしく天狗だったと俺は信じたにちがいない。これからは不思議だと思うもの、変なものには良く考えて当らないといかん。と語ってくれたことがある。

「ゆうれいの正体見たり枯尾花」という句がある。ゆうれいと思った物が実は枯すすきだったことも、天狗だと思ったものが奴凧であったことも同じ笑い話の種の様である。

終

原田さんよりのお便り

文章は気力があれば体力は衰えても書けるものと思って居りましたが、そうではない体力と気力は相関関係にある、という事が判りました。健全な体から健全な文章が生れますが九十二歳の体からろくなものは生れません。しかし一生懸命筆を動かしてみました。今回の話は子供に話して聞かせたい様なつまらない実話です。笑って読み下さい。

赤石沢発電所第二工区
赤石沢作業所と奥西河内作業所の思い出（その二）

大村勝枝

「勝つ（私のこと）―もどれ！」「もどれ！」と家路に帰る途中、私が六年生の時死んだはずのおばあちゃんの声でハッと我に返った。車がなんだか前に行っちゃだめだと押されているようで思わずUターンした。その日は雨あがりで地盤も悪く雪とドロとまじったような道をワダチを確かめて車を走らせていた。四月下旬とはいえ赤石沢はまだまだ寒く、道が凍結して危い。日報や諸式計算書を済せ、確か午後四時を過ぎていたと思う。今度登ってくる時買って来る物や店に頼んでくる物など用たしがあったのだが・・・・・。

もどって来た私に「なに、今日は家へ帰らんとあかんじゃなかった？」「どげんしたとよ。」と炊事婦の渡辺、梅原のおばちゃんが心配そうに聞いた。私の前に大井川運送のトラックが二台走っていたので、その後について行こうとしたけれども、そのワダチの後へ続けなかったわけを話した。「そりゃやめとけ！気持悪いとよ。今夜私の布団で寝よう。」と渡辺のおばちゃんが言ってくれた。それからまもなく畑薙大吊橋付近から赤い畑薙大橋を渡って、赤石地下発電所までの間だったと思う、地盤がゆるくなっていた道が一部決壊したという知らせが入った。「行かんでえかったな―、きっとおばあちゃんが守ってくれなすったよ。」と渡辺のおばちゃんが、いっしょになって合掌して下さった。なんともふしぎな日だった。

その夜はおばちゃんの布団の中で、今まで遭った事など話した。

―あの時、福田所長から「大村さん一人で大丈夫か、俺どうしても静岡ハザマ営業所へ行かんといかんようでな、山道の黄色い目印方向をしっかり見て行けよ。」と危険な崩落箇所を教えて下さったのに山道に入ると方向オンチになり教えられた安全な上の道へ行かず地盤の悪いわる場にはまった。〝しまった〟とっさに考え、ストッキングをしっかり木に縛りつけ、それを命綱にして〝かに歩き〟にふせて山肌を越えて、やっと赤石沢作業所にたどりついた―

あの時もおばちゃんに「あんたよう無事に来たとよ。」と言われ、お風呂

↑冬の奥西河内の作業所

に入れてもらったことなど涙して語った。

上司のはからいか、次の朝、日本国土の大西さんが「俺、帰るで連れて行くよ。」といっしょに帰ってくれた。「大村さん、長ぐつの中に塩を一杯ひっかけて歩かんとな、ヒルにくいつかれていかんよ！くつ下が真赤になってな、俺が生理になったかと思ったよ。」などと笑わかして山を下ってくれた。

そんな事があって五月の連休になった。主人が私と奥西河内作業所まで行って見たい、と言い出した。五月三日エスクードに乗って出発、九時半頃井川田代より河川敷に出て下るゲート前は〝あゆつり〟の人達の大会があってか大勢の人がいた。（写真のように、井川から畑薙へ行く道路は大崩壊をおこし不通となり、上流部関係者のみが使用する河川敷道が作られた。当時交通を断たれ南アルプスへの静岡方面からの登山、観光客は激減した。その後トンネルが出来安全に通行している）

赤石沢作業所に十時五〇分頃着いた。急な訪問なので、奥西河内作業所へ事業電話で当直の大崎さんに連絡してもらったがなかなか通じなかったが何とか連絡をつけてくれた。奥西河内作業所まではなお約一時間を要し、車を乗りかえた為「おい、タイヤは大丈夫か。」と心配して車の下を点検出発。到着した時は昼食時となっていた。長谷部所長が笑顔で迎えてくれた。いろいろ気を配ってくれて掘削したトンネル坑を歩かせてもらったり、お茶を頂いたり、主人も良い保養と勉強になったと話していた。「いい人達だな―」と建設現場の人達の御苦労を知り心からそう言って、家の者にも私の仕事の一部を理解してもらえた事がうれしかった。

（写真は赤石沢発電所奥西河内トンネル工事、奥西河内えん堤より流れを導水するトンネル、ここより四、五六四メートルの導水路、一六三メートルの有効落差によって発電する）

平成六年という年は又いろんな事が多かった。ある時は小河内方面（山梨県伏岳登山道から山梨県雨畑林道へ続く）へ行く道と畑薙方面へ行く分岐点付近に静岡県警の宿舎が立ち、毎日、交替で監視し、毎度運転免許証や工事入門許可証など持参しているか調べられた。最上流部の三軒小屋の方では、山梨県よりの監視体制がとられていたとか。

この頃、松本サリン事

件や、富士宮総本部、上九一色村などオウムの事がマスコミで毎日のように報道されていたころだったと思う。「もう顔で通してよ。」と私が笑って言うと、警察官が「やーしっけい。」などと笑って答えながら調べた。ある時その近くでパンクして困っていると、若い警察官が一生懸命なおして下さった。「あーたお礼しますから ありがとう。」と頭を下げた。――あー助かった。たまには良い事もあるもんです。

その後も天候の悪い時や危険な時は上司の計いで御衛さんを付けてくれた。秋田の中野渡さんはバカカの持ち主で、重い荷物も軽々とさげてくれたり、沖縄出身の宮里君はちょっぴりダンディで給料後の個人送金のたくさん入ったリュックを背負って水の流れの厳しい所を渡してくれたりした。

全国各地から集まって来た人達がお国言葉で「めんこいな」とか寒い時は「しばれるなー」九州の人は〝火の国や〟とかで「あげんこげん、どげんした」とか「今度はよだきゃ」(今度はやる気がしないこと)とか言って笑わかした。

仕事が一部完了するたび焼肉大会やお祝をした。カラオケをやったり酒を飲みかわした。山の中で一番の楽しみだったと思う。これで皆なストレスを解消してまた仕事に燃えた。仕事の時は危険がいつも背中合せの為、鬼の首をつけた様な所長を始め職長も皆な陽気になり人が変ったようだった。口は悪いが根は優しいのが現場の男達だった。

時は流れ、いよいよ完成近くなり、平成七年七月の健康診断を椹島の中電の広場に行った時は、五年間ずっと仕事していた人もいたが、最盛期の十分の一ほどとなった。いよいよ上部やードのインクライン基礎ハツリや撤去後の整地作業、植生土砂付け、土納づくり、宿舎片付処理、荷物の移動、宿舎材料、集積焼却と毎日毎日暑い中皆なして頑張って片付をした。

赤石沢作業所のおばさん達

この工事で、青山機工、赤川索道、東海サービス、駿遠レッカー、大建ハウス、ナシオ、田原鉄工、大野屋、大建ハウス、小松ハウス、共和東京産業、中央精機、大島応用化学、中村電気工事と書ききれない多くの業者にお世話になったのです。井川では安竹石油、栗下商店、栗紀商店、魚貝、長島酒店、井川湖写真堂、農協、官公庁と皆な暖かで親切にして下さった。

私は思いました。山の奥で全て不自由、不便さがかえってお互を大事にし助け合った美しい姿であったとつくづく感じ、皆な思いは同じで皆のおかげで頑張れたんだと。

やがて平成七年九月十二日、最後のハザマの出来高請求書を事務所も撤去された為、東海フォレストの椹島ロッヂまで書きに行った。映画で見た石原裕次郎の黒部の太陽でおなじみのずらりと並んだ二つ折りの布団のある暗くさい部屋で所長と書いた。次の現場が取れることを祈りながら。そして通帳

や残金を片づけた。これでこの仕事も終りと思うとすごくさみしかった。最後の挨拶をJVの所へ行ってした。三井の中斐副所長とハザマの大島様、佐藤様に会った。「生きておれば どっかでバーするよ！」なんておちゃらかしてさみしそうに笑っておられた。皆な御苦労様でした。その後で福田所長と共に井川の商店へ全部お礼に回った。

いよいよ九月二十日夜、井川の大西屋旅館で解散会が開かれた。業者関係者で残った人はわずかであったが、名古屋より中興建設の根本会長もかけつけて下さった。この時とばかりに皆なで赤石沢発電所第三工区完成を祝し乾杯した。「ほんとうに皆な命がけだったなー」。よくやってくれた。御苦労さん……」中興建設工業㈱赤石沢作業所統括の福田所長もしばらく胸がつまってか、言葉が出なかった。家庭を顧みる暇もなく遠く北海道から九州方面より来て働いてくれた人達、そしてまるで尺取虫みたいに一時立ち止っては進むモンスターのような掘削機T・B・M（トンネル・ボーリング・マシーン片押し高速の掘削が可能）との執念を燃し働いてくれた坑夫や後向のことなど、走馬灯のごとく脳裏を過ぎってか、無言の中にひとしずくの涙がこぼれた。

「よかった、よかった」皆で手を取り喜び合い、泣きながらそんな言葉ばかりがとびかった。今までの苦労が喜びとなり、その夜は井川の星空の下で大さわぎで楽しんだ。最後に万歳三唱をわれんばかりに叫んだ。

「おめでとう」「ありがとう」「元気でな！」と皆さんの健康と幸せを祈願して拍手喝采だった。

第四話　終り

（赤石沢発電所の概要は61号に記してありますので再度御覧下さい。なお文中赤石発電所第一工区共同企業五社の内大成が大豊の誤りでした。第一工区ハザマ・三井・大豊・日本国土・鉄建企業体におわびして訂正させていただきます。）

TBM（トンネルボーリングマシンによる赤石沢工事 '93.11.16

T・B・M

奥西河内作業所全容

東京のかたすみから（三五）

✿テレビの始めから終りまで

念には念を

渡邊　貫夫

私の卒業期には戦後の就職難が続いていた。昭和二十九年秋、ようやく地元のラジオ静岡から入社内定の連絡を受けてほっとした私は古い部品で作ったラジオをつけた。「こちらはJOVOラジオ静岡浜松放送局、ただいま試験放送中」とアナウンスがあり、続いて春日八郎の『お富さん』、織井茂子の『君の名は』、神楽坂はん子の『ゲイシャワルツ』。こんな私じゃなかったに』や久保幸江の『ヤットン節』など、戦後のヒット曲がつぎつぎと流れてきた。来春、卒業したら入る職場で、このような好きな流行歌を聴けるとはありがたいなと思いながら試験放送に聴き入った。

試験放送は電波法では「試験電波の発射」といわれる法律行為の一つである。昨今の技術システムの失敗の報に接する度に思い出すのは、試験電波の発射である。日本の民間放送の黎明期に放送界入りした私は、本放送前の試運転や試験放送などで、ラジオ局、テレビ局を生む陣痛の苦しみを味わった。それを思い出したのである。

入社の翌年、私は「JOVE三島放送局ラジオ百ワット」開局のため、試験放送要員として三島駅南の田圃の真ん中にある放送局へ転勤になった。

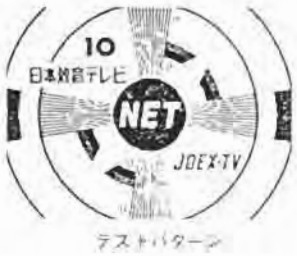
翌日から放送機器の試運転と試験放送が始まった。着任三日目のこと、放送機を調整中、ラジオ電波を送る南瓜ぐらいの大きさの真空管が真っ赤に焼けているのに気がついた。原因はアンテナ系と睨み、外に出て田圃に立っているラジオ放送アンテナ（約百メートル）を点検した。コンクリートの土台（約五メートル）の上のアンテナ基部にある避雷用放電球（アレスターギャップ）が接触事故を起こしていた。私は助走をつけてアンテナに飛び付いて、接触している二つの放電球を引き離した。コンクリートのザラザラの四角柱をよじ登ったので、履いていた新品のナイロン靴下は破れてしまった。今思うと火傷などの大怪我をしないで済んで良かったと思う。その他にも部品や装置の初期不良などが発生し、その手当てに技術不足の私は苦労した。

御殿場の方に待機していた社長（静岡新聞社長兼務大石光之助氏）もまた、少しでも異状が発生すると早朝から電話をかけてよこし、本放送（営業開始）に無事に入れることを心配していた。

かくして、試験放送期間の故障退治が終わり、郵政省当局の検査に合格すれば、郵政大臣から本放送の免許が与えられ、初めて営業開始となるのである。

この検査を受けるには、国家資格を取得している無線従事者でなくてはならなかった。私はこの試験に落ちて、免許証を持っていなく、検査が始まるや検査官から免許証の提示を求められ、無免許がバレテーまいテームから外された。この時のことは未だに忘れない。七十二歳になる今、「あの資格は欲しかったなあー」と夢を見ることがある。私の人生に於ける最大の心残りになっている。

その翌年、日本教育テレビ（現テレビ朝日）が創立され私は東京へ出て六本木で試験放送に従事した。ラジオ静岡の音声だけの時と違い、映像が加わり苦労もしたがテレビの試験放送という初めての体験をいろいろ学んだ。



テストパターン

昭和三十三年暮から三か月続いた試験放送は上の写真のようなテストパターンを基準（憲法？）として、放送局から各家庭のテレビ受像機までの調子を点検するのである。

この丸い図柄は実に良くできていて、カメラ、ブラウン管の調子、トーン（画調）、細かさ（解像度）、絵の良さ悪さ、電波の伝わり方などがすべて分かるのである。このパターンにはビデオの情報がすべて盛り込まれていて、たとえて言えば臨床医師が使う聴診器とレントゲン写真のような役目をするものであろう。この試験放送期間中に不良品や具合の悪い箇所など、すべて吐きださせて退治して、はじめて本放送を迎えられるのである。

電源ケーブルが燃えて放送室が煙にまかれたり、機器を調整中の私の掌だのが放送されてしまったり、フィルムが逆転したり、タイトルの文字が上下逆になったり、音声に映像信号が入ったり、強い雑音が出たり、映像に音声信号が混じったり、画面がしま模様だらけになったり、画面がチラチラしたりなど事故は多発した。

この試験放送は、私たち技術屋の実力発揮の時間であると同時に、これから売り出そうとするメーカー側のテレビ受像機や、放送機器の商品の調整用に、なくてはならないものであることも初めて知った。そんなわけでメーカーの技術者は試験放送時刻に合わせて出勤し、このテストパターンを頼りに仕事をしていた。たまたまこの試験放送が事故を起こして中断すると、メーカーからの問い合わせや苦情が殺到したものだ。

さて、話はかわって昨今のシステム事故。去る二月四日、宇宙科学研究所が開発に六億円かけ作製した国産ロケットを打ち上げたが、その切り離しに失敗した。原因は図面の写し間違えで、本番前の試験運転が出来ない仕組みになっていたからだという。

つづいて四月一日、みずほフィナンシャル銀行がスタートしたが、コンピューターの誤作動で大混乱を引き起こした。原因は試運転を十分やれる段階までに至らずブッツケ本番となったためらしい。

ロケットの打ち上げ失敗や、銀行のシステムミスなどのニュースを見ると、本番前には試験放送のような、厳重で慎重なる試験運転を行うことが、重要で欠かせないものだと痛感する。

システムが巨大化し複雑化した今日、システムの構成要素の噛み合わせ、試験も不可欠である。担当者はさぞ大変だろうと推察し、同情するとともに組織のトップの資質、理解程度も知りたいと思うのは、私だけであろうか。

二〇〇二年八月　記

編集室より

渡辺さんや大村さんの寄稿を書いていますと、テレビ（NHK）のプロジェクトXにも敗けない仕事をして来たのだなー、と思っておりましたところ、下長尾の中野幸逸さんよりお手紙が来ました。前回号の感想と今回旧満州訪問と関係ある事が書かれておりました。ご紹介させていただきます。

中野幸逸さんよりの便り

昨日中川根ふるさと通信第六一号を送って頂き有難うございました。いつも御苦心されている編集に感激しつつ読ませて頂いて居りますが、今回も感動しながら読んだ所です。

その一つは赤石沢作業所の大村勝枝さんの思い出話です。私は昭和五十七年十月町老連（中川根町老人クラブ連合会）秋季旅行で黒四ダムを見てから大町から富山へ抜けた事がありますが、その時開発の壮大な構想に驚き、二十年前にこんな大きな事業をやり遂げたのだから、東海道筋で大井川でもやってくれたら良かったのになあ、と感心したのでしたが、今春長島ダムも完成し漸く安心した所でしたが、過日テレビで黒四ダム建設当時の苦労話が上映されて、懐かしみながら大変だった工事に従事した人達を思んだばかりです。それだから余計にこの記事が深く印象づけられたわけです。

又大村さんはよく働きよく書く人で行動を詳しく表現されて大いにものです。その二、その一と見直して役場の松井さんの部下だった事を改めて知りました。

その次はもう三回にもなる渡邊實夫さんのテレビ談義です。私が昭和二年中泉農学校（現磐田農業高校）に在学中浜松高等工業の高柳健次郎教授が「イ」の字を放映してテレビ製作の第一歩を踏み出しました。

その時私の二年先輩の大川さんが農学校から浜松高工電気科へ進学されて居りましたし、在学中浜松高工学生が「水泳部へ来てくれ、入学の事は何とかするから」と誘いに来た事もあり、剣道部や水泳部として練習試合に行った事もあるので、方面違いでありますが、浜松高工には関心がありました。そして渡邊さんは浜松高工（静大工学部）の卒業生ですから、中川根からも立派な電気技術者が出られて居るので嬉しい事であります。中国へのテレビ普及は大事業でしたろうが、61号11ページにありますように中国の発展はすさまじく、テレビに限らず色々な方面で追いつき追い越せとやられるでしょうから、日本の青年もしっかりしてもらいたいと切に思うこの頃であります。

その三として羽田祐一さん。中川根に立派な半導体技術者が生れて居り嬉しい事であります。お二人共それぞれ時代の先端技術者としてお国の為めに盛されて居る事に感謝するものです。

もう一つの記事、高木鷹一さん茂義さんの歯の丈夫なこと、お二人共近衛師団の兵隊であった事、長寿であること、字の健筆なことを感心させられるものであります。

以上読んだ時の思いです。ふる里通信も発行以来十七年に及ぶわけで、私も三号から綴じ込んであり、たまには開いて見ますし、シロヤシオやアカヤシオの花の写真を添えて下さり、細かい心遣いに町外の皆さんは大変喜んで居る事と思います。　以下　省略

平成十四年　六月二十七日

毎日猛暑つづきで閉口ですが、今日は佐久間町三七°ハ天竜市三七。五とか今年最高の暑さが報ぜられます。痩せた老体が益々干からびてしまいそうです。

さて、お手紙によれば二日から五日まで旧満州東北方

面の視察旅行にお出掛けとの事、暑さの中大変ですが、今では飛行機で北京へ飛び、ハルピンに行くでしょうから、私の頭の中の旅行とは比較にならぬ便利な世の中になりました。

私は満州開拓団当時の旅行のみですから、奉天、瀋陽、ハルピン、チチハルの線より外に出た事がないので、開拓団選出の一番盛であった東北の牡丹江、佳木斯、方正方面は全然知りません。第一次弥栄村とか第三次の千振村や勃利義勇隊訓練所等を見に行きたいと考えた事もありましたが、応召、敗戦となって其の機会を失ってしまい、一切が夢と化しました。

お手紙によれば荒川村にお兄様が居られ、お兄様とご一しょに荒川村の訪中墓参団に加っての旅行との事ですが、荒川村の満州開拓団に就いては、昭和五十八年に朝日新聞浦和支局野口拓朗記者が「遠すぎた祖国」荒川村民満州開拓記を出版されておりますので、私も購読致しました。

第一次開拓団が昭和七年十月東北方面の在郷軍人を主体に選出されましたので、農村経済恐慌にあえいだ当時、関東、長野県が最も関心を寄せ、加藤完治先生の満州開拓論に耳を傾けたのでありましょう。

埼玉県でも元東京都知事だった鈴木俊一さんが大学卒の若い頃、埼玉県学務部社会課長を勤めて居られ、加藤完治先生の話に動かされて昭和十一年九月川西知事に「埼玉も移民をやりましょう」と進言し満州開拓が始まったと書いてあります。

荒川村は昭和十二年春頃より開拓民選出が具体化し、十二年四月には分村計画（二〇〇戸）による先遣隊四十名を選出したとありますから、中川根村より五年程早くから始まったのでした。

中川根村は昭和十六年板谷助役が富士郷開拓団（吉林省）に勤労奉仕隊に参加した報告から渡満希望者が三十余戸申し出があった事から、分村計画へと発展し、十七年四月十日第一次先遣隊選出となったのでしたから、荒川村では既に建設期間が終了し、開拓協同組合に移行し、色々な事業が実施されていた大先輩になるわけです。然し東満国境に近く開拓団群の中心地であったから逃避行には大変ご苦労なさって犠牲者も多かったようですし、現地に在留する方も二十名あるとの事で、慰霊、慰問団が派遣されているようですね。

中川根村は第十次龍山福田開拓団と連携し、竜江省鎮東県に静岡県四ケ団（駿府静岡、白昭浜松）を編成する事となり、西満のチチハル・四平の中間、白城子近郊でしたから、土地は蒙古に近く、豊沃ではありませんでしたが、交通の便もよく、日ソ開戦の県の連絡も早かったので助かったと思います。

中略

もう池田武夫さん、金沢達郎さん、前川伊勢蔵さん、諸田平吉さん等多勢亡くなられ、平成三年に拓友会として五十回忌を営み、六年に智満寺として五十回忌を法要下さいましてから集会もなくそのまま老いぼれるのみで何もかも忘れてしまいました。榊原一郎さんや高木務さんが貴重な生字引であります。

私は二十年五月十四日、チチハル第五二部隊僧康隊に応召し、七月十五日、第二〇、〇二〇部隊と変名され西満に

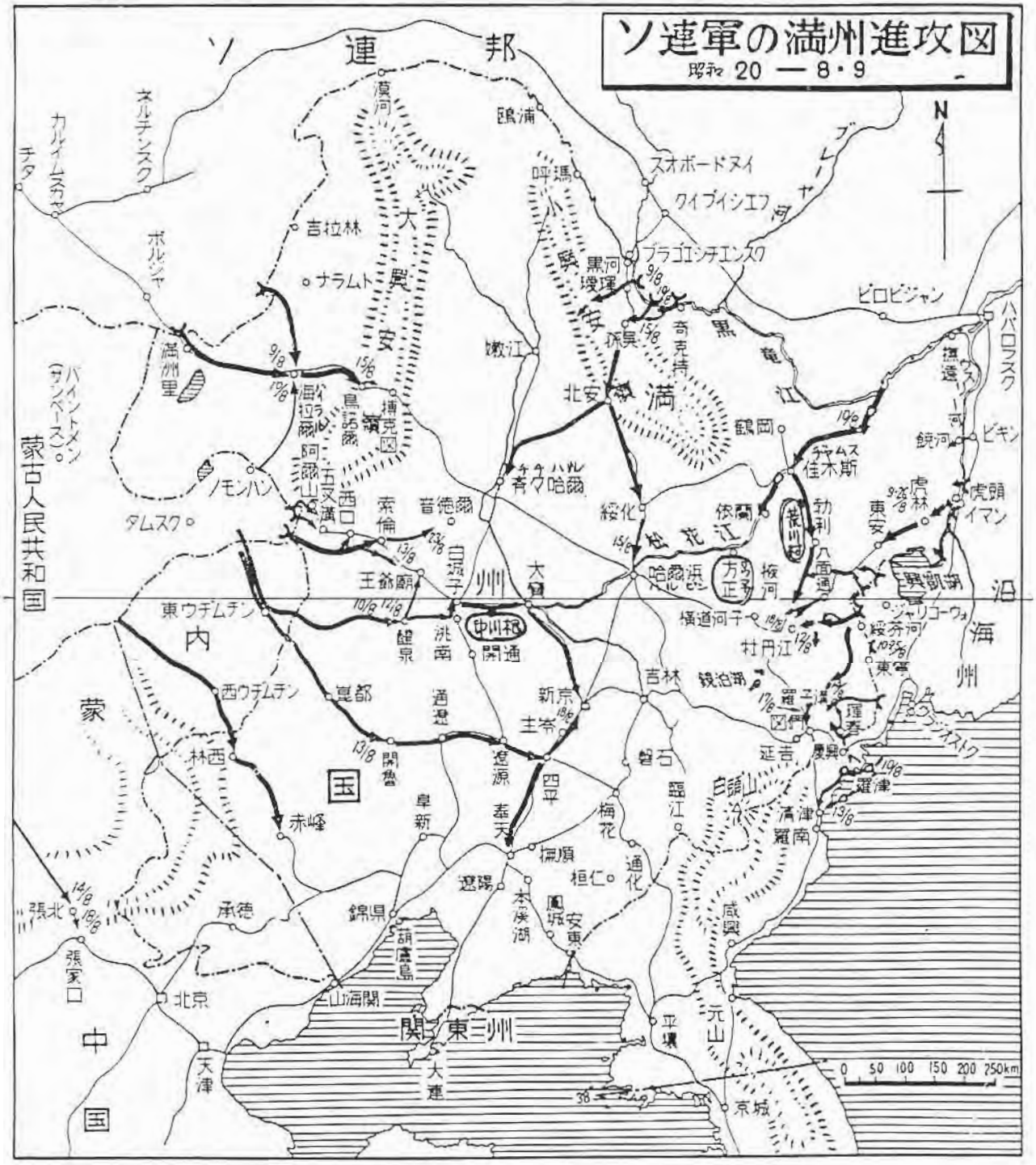
に向けて行軍を開始し、八月五日、五又溝に到着。(興安南省北端・興安北省に近く、ホロンバイル高原の南にあたる)

八日、三国国境の山地に到着し、九日、ソ連参戦によりトーチカの隠蔽が仕事。九日夜は山頂に歩哨に立ち「光に注意し、死守せよ。明朝ハイラル方面よりの軍と交代」との事。十日朝軍旗を先頭に部隊が到着し交代し下山となる。本隊に加わり十一日夜五又溝出発。新京を目指して興安山脈を横断し途中八月二十九日敗戦を知り武装解除、捕虜となりシベリヤ収容所生活。そして昭和二十二年六月十七日無事帰家したものです。

今回の訪中団旅行記をふる里通信に発表される事と思いますので、それを楽しみにお待ち致します。

八月六日

文章では書きつくせない方正、ハルビン旅行でしたが、書いてみました。なお地図は下のを見て下さい。



※義父小澤眞男が残してくれた本に、左の地図がありました。拡大して、中川根村開拓団(周家川根郷)、荒川村開拓団(中川村)の位置を書き入れました。虫めがねでご覧下さい。

日中国交正常化 30周年記念　8月2日～8月5日
荒川村日中友好ハルピン・方正訪問団に参加して

荒川村は埼玉県西部、荒川の上流部にあり、秩父山系に源を発する関東の水源荒川と、秩父鉄道（時々SLも通るとか）と、旧満州開拓団として分村移民した旧中川村など、地形的にも歴史的にも中川根町と共通点が多い事を感じました。

今年は日中国交正常化三〇周年（昭和四十七年九月二十九日調印）の記念の年でもあり、第四回方正墓参の為『荒川村日中友好訪問団』が結成され、宮崎団長（村長）以下関係者の皆さん、埼玉県日中友好協会副会長の渡邊良夫さん外二名の方の中に同行させていただき、総勢十九名の団員となりました。貴重な体験をさせていただきました。旅の日記としてご覧いただけたらと書いてみました。

八月二日朝荒川村を出発して、その日の内に目的地方正に着く。〝遠い〟満州の地は中国北方航空が、新潟・ハルピン直行便を開設してぐーんと近い所になりました。前回までは成田・北京は空路で、ハルピンには列車で行った為目的地までの行程に日数を要したそうです。

十二時十五分、新潟空港発ハルピン行航空機は、暑い暑い日本を飛び立ち、あこがれの大陸へと向かいました。地図上新潟から北西に真っ直ぐ伸ばすとハルピンがあります。飛行時間は二時間半、時差が一時間ですから十三時四〇分には到着してしまいました。あっという間の空の旅でした。

途中の様子は雲間に輝く日本海が続き、ウラジオストック上空付近からは北朝鮮の陸地から遠く半島が青く望め、中国へ入ってからは低空飛行となり山や川が近くなり、牡丹江上空付近からは緑一色の大地、長方形に仕切られた集落が形良く並び、広い畑も並木で仕切られ、箱庭をのぞいているようでした。次第に太く蛇行している河川は季節外れの台風襲来にいたるところで氾濫をおこして、緑の畑と茶色の川のコントラストもすごかった。市街地が目に入って間もなく、空港に着陸しました。今回の訪中団の皆さん一人一人に、中国の地はいろいろの思い出や思い入れがあると思います。私の思い入れは、団員の皆さんの体験には比較にならないほどささなものでしょうか、緊張の面持ちで中国の大地に立ちました。

専用バスで一路方正に向かって出発しました。ガイドさんは流暢な日本語で、四日間を通してお世話下さった好青年、日本の勉強も多方面に渡ってしている様でした。

ハルピン市街を通りぬけると高速道路（日本の高速道路とはイメージが違う）の両側は行けども行けどもトウモロコシと大豆の畑に変わりました。約三時間半バスは西から東に向かって走りつづけ、方正に近づいて来ました。窓の外も見わたすかぎりの水田に変わっています。北緯45度（日本では北海道宗谷海峡）の地でも稲が実るという。

ハルピン郊外のトウモロコシと大豆の畑、飛行機より

六時前、宿泊地方正財政署館に到着。広い道には露店（移動）が並び、大人も子供も道にあふれて大変ににぎやかさだった。皆んなちょっともものめずらしそうな目で見ていたけれども――。すぐに方正県関係者の方々と共に夕食会が催されました。（前ページ写真、中央が宮崎団長）歓迎の言葉、団長の挨拶の交歓の後、食事をしながらテーブルごとの交流会となり、おいしい料理とビールをいただき、長い一日が終りました。

八月三日、中国の朝は早い。五時前には広場に人々が集まっている。何かしら日本人が失ってしまった姿を見ている様な、底知れぬエネルギーを感じる。今日は大切な一日が始まる。気合いを入れ直しての出発となりました。

まず、方正県民政府表敬訪問、土曜日は休庁日にもかかわらず、県令以下関係者の方々が出迎え、歓迎して下さった。埼玉県との友交関係にある為スムーズに訪問は終りました。

いよいよ墓参の時が来ました。方正市内から南東方向にバスで三〇分ほど行った丘に広い敷地の公墓が建っておりました。三つの円形の遺骨を納めた所の前には『方正地区日本人公墓』の墓標があり、その前に『中川村開拓団殉葬者諸々霊』の位牌を供え、深い祈りをささげました。

この公墓は荒川村の人達が中心になり、建てられたものだそうですが、昭和二十年八月九日、ソ連軍旧満州進攻により一般日本人が様々な所で何百万の命を落したのか、特に国境に近い開拓団民の犠牲者の多さは想像を絶するとの事ですが、この地の外に、犠牲者のお墓がないのだそうです。（九月二十五日NHKテレビプレジェクトX、山本慈昭さんの時もこの公墓が写された）

↑方正市街

ここには、旧満州で命を落した数えられないほど大勢の人々の魂が集まり眠っているのだと思いました。方正の人達が守って下さっているのか、松や雑木林に囲まれた墓地は、きれいに手入れされて「日中友交の絆」や「中日友好園林簡介」の看板もありました。

何故、中川村がこの地で大多数の犠牲者を出したのか、と当時の状況を聞く事が出来ました。中川村はこの場よりはるか東北東の勃利（ボリ）と佳木斯（ジャムス）の中間あたりに開拓入りした。松花江・牡丹江など大河の下流で肥沃な大地は、作物が豊かに実り、入植前は、満州の人達の穀倉地だったそうで、大切な大地を日本人に提供して別の地へ行くか、ワーリー（労働者）として、日本人に使えるかであったため、口には出さなくても反日感情は強かったと思われる。中川村だけでなく、東北部を追われた現地人が方正付近に移動して来ていたという。

ソ連軍進攻によりすでに主力を南方戦線に移した日本軍は撤退をよぎなくされ、開拓団民を残して河にかかる橋を

ほとんど爆破してしまった為、松花江や牡丹江、他支流の河川が渡れなくなり大変な難儀をしたとの事でした。団員の男性は矢にかり出され、女性と応召をまぬがれた男性、老人と子供が背後からせまるソ連軍に逃惑い、着の身着のまま、川を渡ったり、回り道をしてやっとの事でたどりついた方正で、力尽き息絶える者、自決する者、殺された人、なお逃げた人、方正の民家に助けを求めた人など・・・・想像を絶する光景の中、この地でバラバラになってしまった、との事でした。

皆、この地を去りがたく、現地の人達との交流をしたり、写真を撮ったりしていましたが、出発の時が来てしまいました。今夜の宿泊地ハルピンに向けて出発しました。夕方ホテルに到着、そろっての夕食の時、又辛い話を聞きました。三人の女性の方からです。

―新井さんのお話より――　新井さんは一歳に満たない娘を かかえて、生死の決断をせまられた時、"我が子を殺すわけには行かない"と方正の民家に助けを求めました。娘を育ててもらう代償に一心不乱に働きました。今まで日本軍らが現地の人達にして来た事の報いも受けなければならなかったし、寝るまもないほど養家につかえたそうです。ただ救いは、おじいさんが娘さんを我が子の様に可愛いがってくれて娘さんは幸せに育てられた事でした。新井さんの献身が実ってか、娘さんは十九歳で結婚、見届けて懐かしい日本へ帰って来るのですが、国交の無い時代で、香港にしばらく滞在していてやっと帰って来れたのは、昭和四十年、東京オリンピックの時になっていたそうです。(写真のお二人)娘さんは身元も判っていた為、やがて中国残留孤児報日団第一回に母子は再会したそうです。新井さんは心豊かな素的な方でした。

―宮崎さんのお話より――　宮崎さんは長春吉野町の病院の看護婦さんでした。方正の方に看護婦が不足しているとの事で、方正の病院に来て間もなく惨事に巻き込まれたといいます。方々から集まって来た引上げ者とともにハルピンを目指して行進したそうです。約一八〇キロの道程は、遠く、夏から秋と変わり寒さも増したそうです。その中で――出産する人も多くいて、その時は歩みを止め、手伝い、皆んなでボロキレを出し合ってとり上げ、後産が出たら出発・・・・。一日か二日で赤ちゃんは死に、母もやがて列から外れた・・・・・。「死んでしまうと必ず現地の人が服をはぎに来たのよ。」「夜は狼が死体を持ちに来るし。」「夜襲もあるし・・・・」「私は独身だったので、身の振り方がらくだったけど、家族のある女性の苦労はね――。目の前で夫が殺されたりして、並大抵ではなかったのね・・・。」やっと辿りついたハルピンの収容所の一階の部屋のドアを開けると、全員死んでいる。次の部屋も次の部屋も死体の山・・・・二階も三階も四階も五階も全て寒さと飢えと被労で死んでいた・・・・・死体は春までそのままにされて・・・・・。」助け合いはげまし合って二年余やっと祖国へ帰って来たとの話を、皆固唾をのんで聴き入った。あまりの衝撃にその夜は、しばらく寝つかれなかった。

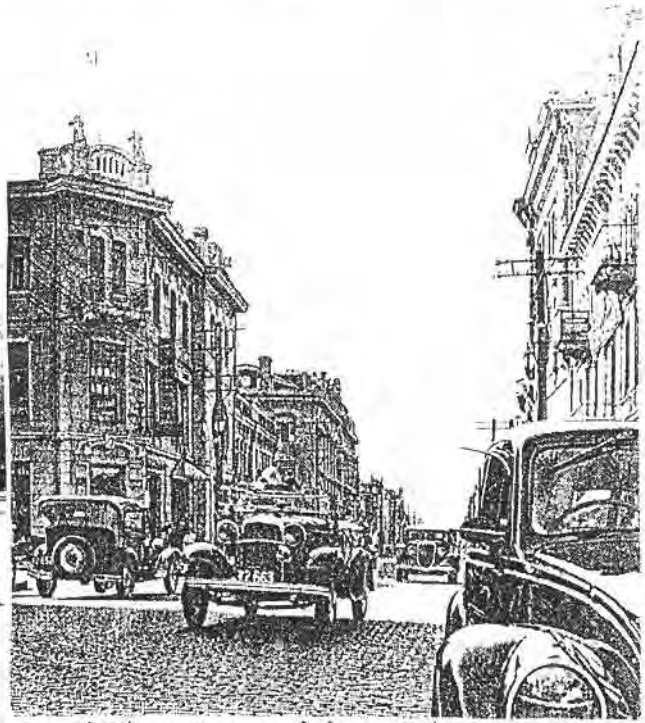
八月四日、ハルピン市内見学　人口三八〇万人の大都会、市の北側を流れる松花江を遊覧船に乗ったり、中洲にある太陽島へ行ったり、市内をバスで見学したり、博物館でマンモスの化石や歴史を見たり、児童公園で子供が全て運営する列車に乗ったり、ロシア色の残る古い市街を歩いたり、美

しい花嫁さんを何人も見たり、エキゾチックなハルピンを満喫しました。

八月五日早朝出発、数々の思い出を残して、八時の五分発中国北方航空機は新潟に向けて飛び立ちました。

この訪中の旅に参加させていただき本当によかったと思っております。出会った中国の人達から、過去の日本のお話は一度もありませんでした。むしろ気を使っているのでは、と思われるふしもありましたし、皆、親切で友好的でした。※

写真、60年前のハルピン駅と、現在のハルピン駅。
ホテルの窓からは、プラットフォームが見え、客車が列をなしていた。北西にチチハル、ハイラル、満州里。北に海倫、黒河、東南に牡丹江市、そして南に長春、瀋陽はるか北京に続く、鉄道なのかと、思った。駅前広場は広く、にぎやかだった。



写真下、60年前の石だたみ道路と、現在の様子。
写真を撮った所が、よく似ている様に感じたので、比較してみました。
現在は街路樹が、茂って、大変美しい通りになっていました。
ガイドさんの説明で、満州国時代の建物が今も使われていることが判りました。
今はむき、金沢さんは、ハルピンの中村病院に看護婦さんで勤めていらっしゃったとか、横田さんは、宝石商をやっていたとか、地名の藤田さんの部隊は、この地の倉庫が火事になり、改散、現地のお店で働らいたその様なお話の記憶をたどりながら、市街を見ていました。

※しかし、ハルピン郊外には身の毛もよだつ関東軍七三一部隊の残した仏跡がそのまま保存され歴史として残されているのです。そして中国に残されて今も生きている同胞の方々、育ててくれた人々、無念の死をもって中国の大地になった人々を決してわすれず、二度と過ちを犯さないことが、私達の使命ではないだろうかと思いました。

方正は住んで見たい所、ハルピンはまた訪れたい所です。

今回の訪中団に参加させて下さった荒川村の皆様に深く感謝申し上げますと共に日中友交の輪がますます広がることを祈ります。

終

追伸

中国の携帯電話の普及はものすごく、あらゆる所に電波が張んでいるとの事、発信場所は国や公共の施設、各家庭一台は必ず携帯しているそうです。

中国の貨幣価値は高く、日本の一万円が六〇〇～七〇〇元、一ヶ月の生活費に充分な金額だそうです。しかし、案内された土産物のお店は日本円が使えましたがけっこうな高値の商品ばかりでした。

一面のトウモロコシ畑と大豆畑、青々しているのに畑の臭いがしないのは何故？豆科植物特有の根粒バクテリアで窒素肥料……まさか化学肥料じゃないよね――少々心配になりました。

食事にでたモチトウキビの見事な粒ぞろい、でもピーターコーンになれてしまった私達は甘味がなくて食べにくかった――。

村長さん曰く「訪中の度に発展をしている」始めて見る農にもエネルギーを強く感じさせる。途中で合流した長春大学の日本語専攻の学生さんのくったくのない笑顔と瑞々しさに明るい未来が感じられました。

以上

彼岸花も咲き終り、こちらも本格的な秋を迎えました。今回のふる里通信も八月末から取りかかり、とうとうまとめるのに一ヶ月以上もかかってしまいました。年と共に作業力の低下が見られるこの頃ですが、次回も頑張りますから、どうぞおゆるし下さい。

三ッ星天文台も二年目に入りガイドも少しなれてきました。白羽山七〇〇メートルの光源の少ない地形ですから望遠鏡を通しても肉眼でもすばらしい星々を見られます。通年金、土、日、夏休み（七月二十日～八月中）は毎日開館しています。これからはますます美しく見えます。是非観に来て下さい。

61号では私事を載せ大変ご心配をおかけしました。元気で頑張っていますからどうぞよろしくお願いします。

定期講読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共　200円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行（3ヶ月ごと）を予定しております。

購読料は郵便振替口座をご利用下さい。1年分800円（4回）15回分位まで（3,000円）お預り出来ます。

購読が切れた方には振替用紙を同封致しますからご利用下さい。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも、是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号

00870－4－81556

発行責任者　〒428－0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾859－6

小沢節子

TEL　0547－56－0015

FAX　0547－56－0020